

槐

かい

岡井省二創刊

創刊 20 周年記念特集号
平成 23 年 7 月号



平成二十三年七月一日発行 第二十一卷第七号 通巻第二四一号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

「槐」創刊二〇周年を迎えて

「槐」はこの七月にめでたく創刊二〇周年を迎えました。創刊主宰岡井省二先生のもとで十年、そして私が継承しての十年でした。いろいろありましたが、ここでこうして二〇周年を皆で祝うことができて本当にうれしく思います。

このめでたい二〇周年にあたり、「第二〇回槐賞」に柳川晋氏を推挙いたします。また「槐安集同人」には西村純太、中野京子の両氏を推挙いたします。さらに、新同人として田中信行、有松洋子、山田佳子、本間瓦子の四氏を新たに「槐市集」に迎えることといたします。

「槐」はここ数年、創刊十五周年、創刊二〇〇号と大きな節目を越え、創刊二〇周年を迎えましたが、今回の受賞者、新同人の方々は、そんな「槐」にあって、それぞれの立場で槐の発展、自己の研鑽に尽力されました。これからも存分に活躍されますよう期待いたしております。

次は二五〇号、さらには二五周年を目指し、邁進しましょう。

槐 創刊 20 周年記念作品抄

去年今年木霊も魂もめでたけれ
鳩いきやうやうと潜きけり
はちきれさうな新米に手を突つ込みぬ
卯年かな跳ねて弾ける繭の玉
はたとせの遠近の道槐咲く
復活祭鯉ふくよかに泳ぎゐる
潦さざなみたちて踏絵かな
鳥一声吾れも一声初御空

雨村 敏子
石脇みはる
犬塚 芳子
犬塚李里子
岩下 芳子
岩月優美子
大島 翠木
久津見風牛

槐 創刊 20 周年記念作品抄

一面のかたかごの揺れ無音界
さづかりし齡大事に去年今年
寒の虹齡ささへる木椅子かな
ミカエルの翼たてたる冬日和
大縄が大地を鳴らす寒がわり
ほら貝の穴覗きある菩提の実
剪定の済みし槐の幹に艶
睨み鯛ひとりにされし黙かな

熊川 暁子
近藤 きくえ
近藤 公子
鈴木 初音
竹内 悦子
谷村 幸子
寺田 すす江

槐 創刊 20 周年記念作品抄

白髪にかもじたつぷり花衣
滝しぶき万歩の脛に賜りぬ
寄せ太鼓槐の花の盛りなり
ヴィーナスの午睡のあとのシートかな
阿修羅像に少年の面紫苑咲く
花団子楊枝の先の閻魔王
歳晩のゆたかなるもの紅の雲
風紋の影より昏るる氷湖かな

中島 陽華
永井 博光
延広 禎一
橋本 正二
本多 俊子
本間 瓦子
松原 仲子
吉田 順子

鳥雲に

高橋将夫

石一つどけて始める田打かな
春の山人間臭くなりけり
剪定の庭師鋏で指図せり
うつろひの色のへりオトロップかな

突 つ つ いて 突 つ かれる 仲 春 の 鴨
恋 の 火 の 通 り す ぎ た る 末 黒 野 よ
春 天 は 星 の 生 ま れ て 死 ぬ と こ ろ
肝 つ 玉 臙 の 底 に 落 し た る
春 の 夜 の 鏡 の 中 の 吾 と 鬼
固 執 と は 岩 に 張 り 付 く 鮑 な り
曲 が つ つ も 折 れ ず に 生 き て 鳥 雲 に

槐安集

水野恒彦

花に寝落つ三十年後の吾である
象のゐるうつつ空ゆく花吹雪
月朧おぼろに父のデスマスク
指に抓めばすぐわかる蝶の骨
踏絵てふ歩むほかなしと歩む

延広禎一

東日本大震災五句
荒磯へ鎮魂の酒浮いてこい
幹削られし桜ほころぶ般若かな
医・職・住・育地震の地の音や春
ハーモニカの男の子斑雪の津波跡
禍事まがごとの根の国に消ゆ大祓

加藤みき

たつぷりと樹樹に日のある緑の日
花槐梯のなほ新たなり
三光鳥の来てをる闇に喝采す
人逝きて蔵に住み継ぐ青大将
花桐の散り敷くところ祈りあり

石脇みはる

かはらけ
土器の飛びたる谷のさくらかな
春筍の大きな穴を残しけり
生垣を繕うてをり春の雷
朝掘りの筍の土ねばりつき
死者生者さくらのもとに寄りにつけり



中島陽華

青饅やアーチの門をくぐり来て
反魂丹舐めたる朝の櫻かな
春暁の耳引張つてをりにけり
丈夫ますらをが足裏揉みをり花の夜
訂正のある黄金文字亀鳴けり

栗栖恵通子

みちのくの桜は逝つてしもうたか
鳥帰るなんぞ持たしてやるまいか
花の夜の抜き差しならぬ河馬のゐる
のどけしや髭あたらせる漢どち
春うらら妊婦三人通りける

竹内悦子

満開の笑顔となりし佛の座
御形はこべら川の流れに濡れてをり
落椿賑やかなりし大地かな
夜桜や水草生ひたる舫ひ舟
小女子こなごや上着一枚脱ぎにける

雨村敏子

春潮の沖大空を押し上ぐる
黄金色に枯れしものより緑吹く
筑波嶺まで春潮のうち寄する
喪の家に傘を畳みし花の雨
春泥を付けて来たりし親しさよ

小形さとる

「愛」と書く春らんまんの眠たさに
手の届くところの木瓜を愛でゐたり
春光のひとつに内科・泌尿器科
二度わらし蝶とふたりの真昼なり
薫風や便り書くより飛んでゆく

本多俊子

なんとかなるさ芝桜に囲まるる
水桶に砥石の沈む鳥曇り
米一粒に重さあり昭和の日
春の闇ピアノの音の獣めく
薬玉や見えざる雲の流れをり

久津見風牛

代搔きや蓮如が先を急ぎをり
神とても花見にかまけ膝くずす
信心も中途半端なり花杏
松の芯神の方から降りてくる
断層の上かも知れず早苗打ち

近藤きくえ

春宵や生絹裁ちをる匂ひして
若草にまろび息吹きにふるるまま
地球儀に子らの夢あり春灯
満天星の万の小鈴の揺れはじめ
朝の気を吾もたつぷり双葉かな

近藤喜子

夜蛙や山また山の浮き上がる
春愁や何にぎりしめ生まれきしか
突つ張つてゐる少年に春の蝶
水音のたつぽんと春惜しみけり
満天や星の匂ひの別れ霜

谷村幸子

仏頭の頬を撫でをる今年竹
桜並木まわりてよりの朝の膳
手を合わす無事の朝夕春の空
唐門の色あせてをり新樹晴
雉子鳴いて平群へぐりの叔母の逝きにけり

瀬川公馨

土佐堀川とさほりに賽を投げたる春の月
人の世の滅亡談義春の宵
彼岸会や元興神がこせを友としたりけり
八寸に業腹な奴桜鯛
客人に干した布団と囀と

久保東海司

臘梅や峽を放れぬ斧こだま
黒板は平仮名ばかり新入生
白鳥の拡がる水尾に柳の芽
蜘蛛の囿の蝶放ちやる忌日かな
墨継ぎの筆に息とめ鳥雲に

西村純太

佛堂の貌のひとつが臃なり
指入れて高野聖と渦を巻く
父子草衝へてゐたる善知鳥かな
古池の月光に棲む蛙かな
花ごろも如来しづけき遊び足

中野京子

白木蓮の内に焰を上げてをり
窓扉順に開けゆく柿若葉
言の葉はあ・うんの二人静なり
白髪のおちあたるまで飛花落花
大空と大地を知らず地下の春



槐市集

中道愛子

揚雲雀ただ今護岸工事中
荒縄につなぎ室津の干し鰯
町角のカレーの匂ひのどかなり
山吹の一重が好きと言ふ子かな
パンジーのどこかおどけて見ゆるなり

橋本正二

春野点に膝ぷりぷりの娘と並ぶ
スパッツの膝にあそびし桃の花
アーケードを歩き交う人も春の中
恋猫の影くねらせて路地を出る
葉桜や髪ととのへて女坂

橋本順子

一片の落花日に映え水に映ゆ
小鮎入れバケツの揺るる小刻みに
ふらここの揺れにまかせし身体かな
片栗の一群に日の留まりぬ
楽隊について歩ける日永かな

藤澤陽子

大寺の溝にもつれし蝮の道
大揺れにゆれてこぼさぬ桜かな
灯のみつばつじでありにけり
募金箱持つ子ら並ぶ花の雲
花菜漬もとめてつつむ小風呂敷



槐集

高橋将夫選

鯉五郎黄金の泥に微睡^{まどろ}める 守口 柳川 晋

海神の手の鳴る方へ渦見舟
宜^{よろ}候^{そう}宜^{よろ}候^{そう} 清明の外海へ

時を超え追ふ清姫と逃水と
ビッグバンの記憶が潜んでゐる臚

置唄や黒子の曳きし春の闇 枚方 熊川暁子

鬱金ざくらに触れたるやまと言葉かな

神寂の色気ただよふ春の聯

銀沙灘にこころ戯むる啄木忌

引鴨のくつがへしたる沼一つ

アルトよりソプラノへと春の水 安城 近藤公子

鎮もれる胸の奥なる花笈

花疲れははを忘れてしまひをる

神々の世の宴かも花吹雪

虚に生れて虚に戻りゆくなめくじり

手作りの針に釣らるる桜鯛 枚方 谷岡尚美

惜春や海馬の位置をたしかむる

地震の地に近づく八十八夜かな

魂抜けてをるやも知れぬ古雛

うき世とは山葵の辛さ笑尉

啄木忌骨あおおと残りたり 岡崎 岩月優美子

仙境へつづく連翹明りかな

葉や雨後の光りのただなかに

大峯の中は空つぽ亀鳴けり

晩春のトレモロを聴く夕べなり

大空のしだれて枝垂桜かな 高松 十川たかし

白れんの照りかへしくる中二階

うつすらと春塵を置く甕の水

ぶらんこ高いきれいな空気吸うてくる

蝶が好き蛾は大嫌い母となる

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

時を越え追ふ清姫と逃水と 柳川 晋
時を越えて語りつがれる紀州道成寺の伝説。大蛇となった清姫が時を越えて安珍を追っているという。逃水もまた追えば時を越えるかもしれない。

〈ビッグバンの記憶が潜んでゐる臚〉も時空を超える一句。臚とはビッグバンのとき発生した塵と想像してみるのも愉快。

引鴨のくつがへしたる沼一つ 熊川 暁子
沼を埋め尽くした鴨が一齐に飛び立つ様子がまざまざと目に浮かぶ。「くつがえず」の描写がユニーク。〈置唄や黒子の曳きし春の闇〉の妖しさ、〈鬱金ざくらに触れたるやまと言葉かな〉の雅もまた捨てがたい。

虚に生れて虚に戻りゆくなめくじり 近藤 公子
なるほど、蛞蝓にはそんな感じがある。塩をかけられて溶けるのは虚に帰るのかもしれない。〈アルトよりソプラノへと春の水〉は水が低きから高きに流れるようで楽しい一句。

手作りの針に釣らるる桜鯛 谷岡 尚美
手作りの釣針で鯛がつれたとはまためでたいことである。手作りの釣針で釣られて、鯛も本望であろう。

〈うき世とは山葵の辛さ笑尉〉は浮世の核心にふれるようでほほえましい。

仙境へつづく連翹明りかな 岩月優美子
連翹の花の鮮やかな黄色。なるほど、その花明かりは仙境に続いているように思えてくる。

大空のしだれて枝垂桜かな 十川たかし
枝垂桜がしだれて見えるのは、実は天空がしだれているからだと作者はいう。そう言われると、なんだかそんな気がしてくるから不思議だ。

のどかなる川面の雲を掬ひけり 岩下 芳子
青空に雲が浮かんでいる麗らかな春。水を掬うと川面に映る雲がゆらいだ。まことにのどかな風景。

足るを知る吾にかたかごまつ盛り 竹中 一花
人間、足るを知ることが大事。知足という。かたかごがまつ盛りでめでたい。

春泥を払つてくれる手にも泥 近藤 紀子
親切に泥を払ってくれた方がいいが、その手にも泥がついていたという。ありがた迷惑な話ではあるが、気持だけはありがたく受け取っておこう。

春光や絵の中にある出入口 中田 禎子
絵の中に入って、また出てこれるそう不思議な一句。不思議な国のアリスが思い浮かんだ。(以下略)